新潟県三島郡寺泊町

東北電力送電線鉄塔建設に係る

# 五分一城跡発掘調査報告書

1991

寺泊町教育委員会

# 序

平成２年の夏に行われた五分一城跡の発掘調査が大きな成果をおさめ、ここにその報告書が刊行されますことに対し、関係諸氏のご尽力に深く敬意を表します。

寺泊町を含めた西山丘陵とそれに併走する曽地丘陵及び島崎川流域は、先人の築いた遺跡が数多く存在しています。特に寺泊町には新潟県の史跡に指定された「横滝山廃寺跡」をはじめとする重要な遺跡もあり、また昨年には隣の和島村の八幡林遺跡において、「沼垂城」記載の木簡が出土するという、歴史的な発見があったと聞いております。

近年、社会の急速な変化によって我々の生活環境も大きく変化し、それに伴う開発事業も多く計画されております。これらはまた、先人の文化遺産もまた破壊の危機に瀕していることの表れでもあります。

本来、こうした遺跡は、我々郷土の歴史的遺産であり、その現状のまま保存し後世に伝えていくことが、現代に生きる私どもの責務といえるわけでありますが、やむをえず開発しなければならない場合は、事前に発掘調査を行い、記録保存の形をとらざるを得ないと考えております。今回の調査も、電力の安定供給という社会的要請により行った発掘調査であり、その範囲も必要最小限に行ったものであります。

今回調査した五分一城跡は丘陵部の最高峰に位置し、眺望のきく軍事的な重要点にあり、室町時代の末期に上杉家組頭、斎藤平八郎の居城であったとの言伝えが文献にも残されています。幸いなことに工事箇所が城の中心地から外れていたため、城跡の遺構や遺物は少なく、それよりも歴史の古い縄文時代の遺構が見つかりました。

詳細は、本報告書に譲ることといたしますが、この報告書の発刊にあたりまして、新潟県文化行政課諸氏のご指導、また岡本郁栄先生をはじめ調査にご協力をいただいた方々に対して深甚なる謝意を表する次第であります。

平成３年２月

寺泊町教育委員会 教育長 長谷川 達 栄

# 例　　言

1. 本書は、東北電力㈱の送電線増強工事に伴う五分一城跡発掘調査の概要である。
   また、五分一城跡の所在地は、新潟県三島郡寺泊町大字五分一地内及び高内地内・求草地内にかかっているが、調査区域は五分一地内である。
2. 調査にあたり、東北電力㈱新潟支店と協議を行った。
   調査の範囲は工事等により破壊が予想される遺跡の最小部分に押えてある。
3. 調査は、平成２年８月20日から同年８月22日に寺泊教育委員会（教育長　長谷川達栄）が、東北電力㈱新潟支店との委託奨約に基づき実施した。
4. 遺物の整理及び報告書の作成は平成２年10月から平成３年２月にかけて行った。
5. 本書の執筆は、発掘調査担当者の岡本郁栄が行った。なお、調査体制については巻末を参照すること。
6. 出土遺物は、寺泊町教育委員会が保管している。
7. 本発掘調査には、各方面から公私にわたり物心両面の多大なご援助とご協力をいただいた。ここに衷心より厚く御礼を申し上げる次第である。

# Ⅰ 調査の経緯

## 1.調査に至る経緯

寺泊町を含む島崎川付近の丘陵地帯には未調査の遺跡が点在することが知られている。

このたび、東北電力㈱新潟支店より平成元年12月11日付けで、電力の安定供給を図るため送電線増強工事に伴う埋蔵文化財の調査についての協議が上がってきた。これを受けて寺泊町教育委員会では、新潟県教育庁文化行政課の戸根与八郎主任および赤羽正春文化財主事の指導のもとで平成元年12月25日・26日の両日にかけて埋蔵文化財の現地分布調査を行った。

計画では、丘陵部分にかけて新たに鉄塔を建設することになっているが、これら丘陵部は塚等の遺跡も存在することがわかった。この結果、遺跡にかからないよう計画変更ができるものは変更する予定であるとのことであったが、地理的に変更のきかない丘陵の最高部にある「№16」の鉄塔が今後の協議対象として残ることとなった。東北電力㈱より計画ルートの見直しがなされ、平成２年２月22日に再び埋蔵文化財についての協議書が出された。この結果、「№16」が五分一城跡の遺跡にかからざるを得ないことになり、発掘調査の必要が生じてきた。

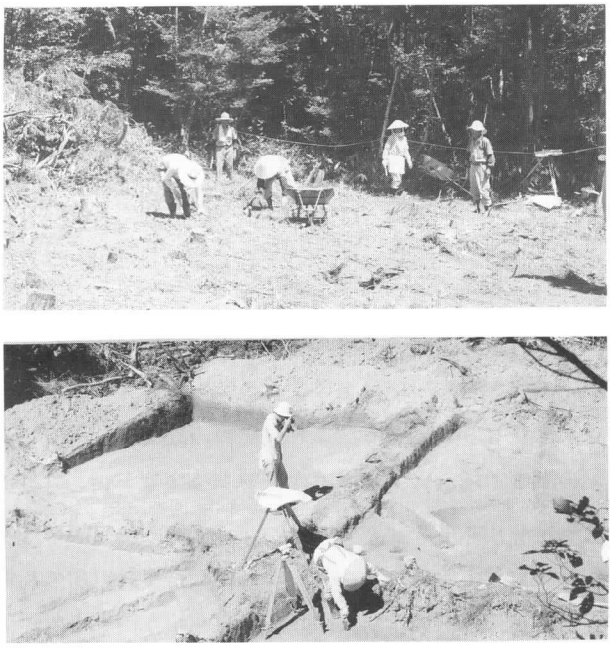
４月12日に県文化行政課より調査の方法および調査担当者についてご指導を仰ぎ、６月１日に東北電力㈱の立地用地および工事を行う東北電気工事㈱と協議を行った。７月中旬になりようやく新潟東高等学校の岡本郁栄先生より発掘担当者として承諾をいただき、発掘調査期間を平成２年８月20日から８月22日の３日間とすることに決定した。

これに基づいて当教育委員会では、平成２年８月８日付けで文化財保護法98条の２に基づく発掘調査の通知を文化庁長官に行った。

## 2.発掘調査の経過

調査対象地は、尾根の主陵部に近い南に緩く傾く雑木林で、発掘に先立って伐採を行ってあった。発掘面積は、建設される送電線鉄塔の規模と工事面積を考え12m ×12m とし、一辺各６m の４グリッドに区分した。

調査初日は、バックホーを使用し、伐採された雑木の後片付けと抜根から開始したが、この段階で調査地区のほぼ中央に、斜面に直行する溝の存在することが確認された。午後から全グリッドの発掘に着手したが、その日のうちにＡ１グリッドから縄文土器片２点



第１図　発掘スナップ

と比較的多くの小礫が、Ｂ１グリッドからは焼土と炭化物の集中区が１ケ所と、その中から縄文土器片１点が出土した。Ｂ２グリッドでは縄文土器の破片が集中するブロックを確認したが、土器片が非常に脆いため取り上げを後回しにした。

調査２日目は各グリッドの境に残したセクションをはずし、遺構確認のためにジョレンがけを行った。その結果、初日から存在が明らかな調査地域中央部の溝は、Ｂ１グリッドの途中までしか延びていないこと、Ａ１グリッドの南西隅に半円形の落ち込みの存在することが確認された。また、Ｂ２グリッドの縄文土器ブロック周辺では、地山面に微細な木炭が多く点在し、堅く締まっていること、ピットと推定される暗色土が楕円形状に分布していることを確認した。その後、これらの遺構の発堀と、さらに遺構確認のためのジョレンがけを行い、Ｂ２グリッドから鉄滓１点が出土した。

調査最終日は発堀した各遺構の実測と埋め戻しを行い、その過程で出土地点不明の土師器１点を採集した。

## Ⅱ　遺跡の位置と周辺の環境

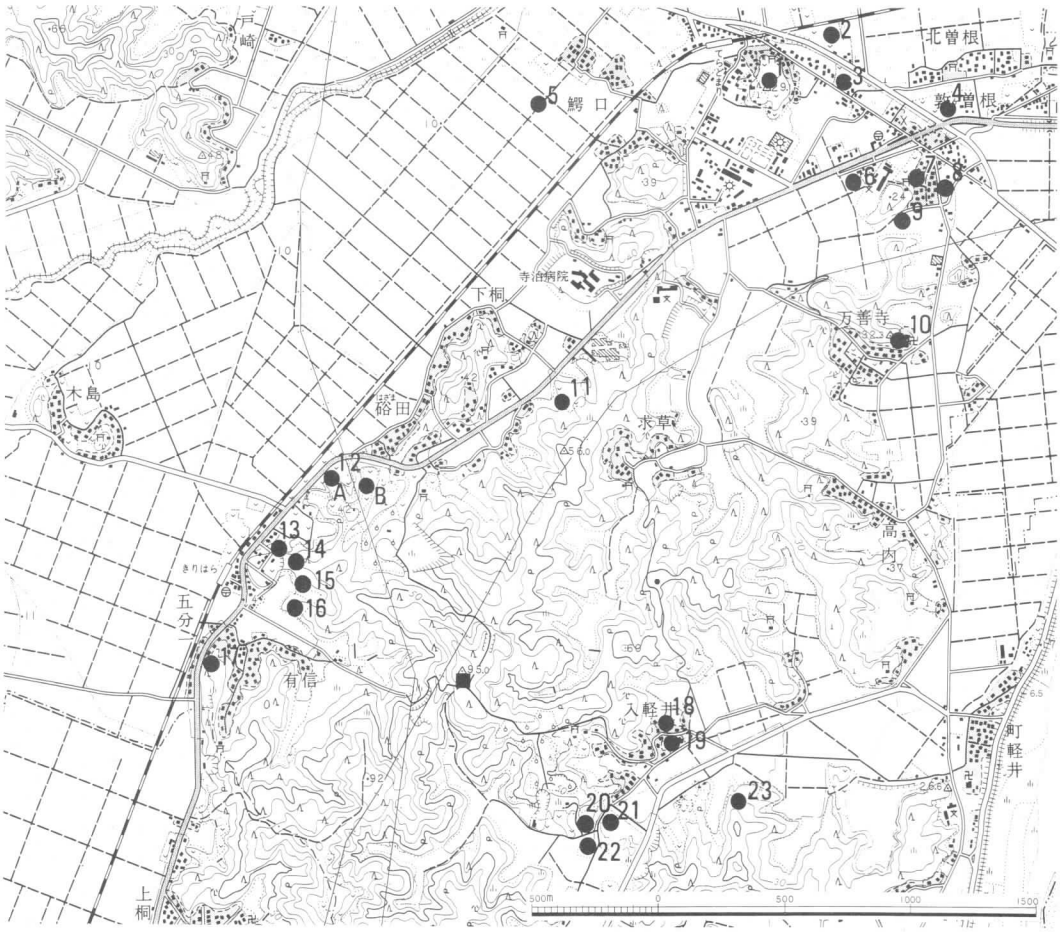
遺跡は新潟平野の南西部に位置し、平野と日本海を防波提のように隔てる西山丘陵のほぼ先端部に立地している（図２・裏表紙）。この地域の丘陵は、南南西～北北東の非常にはっきりした方向性を持つ褶曲構造が発達しており、一般的に背斜軸が尾根を、向斜軸が谷を形成している。

西山丘陵は信濃川左岸に発達する東頸城丘陵から北東に延びる丘陵で、信濃川を挟んで東山丘陵と相対し、寺泊より南方の出雲崎付近で島崎川によって二列に分岐している。日本海に面する島崎川左岸の丘陵は、弥彦山・角田山へと続き、先端部地域は峰岡丘陵と呼ばれている。遺跡周辺で丘陵は90m内外の標高を示すが、南西方向に向かって次第に高度を増し、出雲崎町以南では標高 300mを越すようになる。また、北東部ではしだいに高度を減じ、大河津分水付近で沖積面下に没し、その周辺では丘陵山頂部が島状に分布するのみになる。

遺跡周辺の地形は、東側を信濃川、西側を島崎川の小規模な谷底平野によって限られた半島状を呈しているが、本遺跡東方で寺泊駅方面から求草に入り込む谷と、入軽井から矢田に延びる谷によってさらに東西２列に区分される。なお、東側列には与板町背後の丘陵から高内・敦ケ曾根を通る与板背斜が存在する。

遺跡の存在する西山丘陵先端の平野は、現在、大河津分水の建設によって大きく様相を変えているが、島崎川も大河津分水に至るまでに４本もの放水路を持ち、大雨・洪水時の水を早く海へ排水する工夫がなされている。これは島崎川流域が、下流に信濃川という水量豊富な大河川を控え、信濃川の洪水や増水による逆流の影響を受けやすいことや、旧信濃川河口から60km以上も上流でありながら標高10m ほどしかないことなどから、島崎川自体の排水が困難であったことを示したものといえる。大河津分水を含めた５本の放水路建設以前の島崎川流域は、たびたび洪水に見舞われ、一部排水不良の悪水は、明治初頭まで存在した円上寺潟のような沼沢地を形成していたものと考えられる。

島崎川流域には多くの遺跡が存在する（図２・裏表紙）が、横崎山遺跡の古代寺院跡、「沼垂城」記載の木簡が出土した隣接する和島村の八幡林遺跡をはじめとして、土師器・須恵器を出土する奈良時代から平安時代の古代遺跡が多い。これらの遺跡の大半は、丘陵の裾野部分に立地するが、横崎山遺跡周辺の丘陵北端部では、自然堤防上に立地しているものも多く存在する。また、寺泊町の幕島遺跡や出雲崎町寺前遺跡など、沖積面下１ないし２ｍの層に縄文時代後期から晩期の遺物が出土する遺跡も確認されており、前述したこの地域の条件などから、流域の堆積作用の大きいことを示している。一方、島崎川流域の縄文時代遺跡は比較的小規模なものが多く、そのほとんどが島崎川に面した丘陵の狭い尾根の先端部に、少数が尾根の主陵部や丘陵尾根先端部の沖積面下に存在している。また、弥生時代の遺跡が新潟県の他の地域に比較して多く存在しており、この地域が、奈良・平安時代以前から開発されていたことを物語っている。




1.横崎山遺跡、2.京田寄割遺跡、3.京田三の割遺跡、4.太屋敷遺跡、5.古屋敷遺跡、6.潟畑遺跡、7.山屋敷遺跡、8.敦ケ曽根狐塚遺跡、9.経田遺跡、10.堂山遺跡、11.松葉遺跡、12.山王Ａ・Ｂ遺跡、13.小谷地割遺跡、14.堀切遺跡、15.ごめ遺跡、16.柳橋遺跡、17.五分一稲葉遺跡、18.松割観音畑遺跡、19.谷地遺跡、20.音正寺遺跡、21.五千石溜遺跡、22.杉ノ入遺跡、23. 五五兵畑遺跡

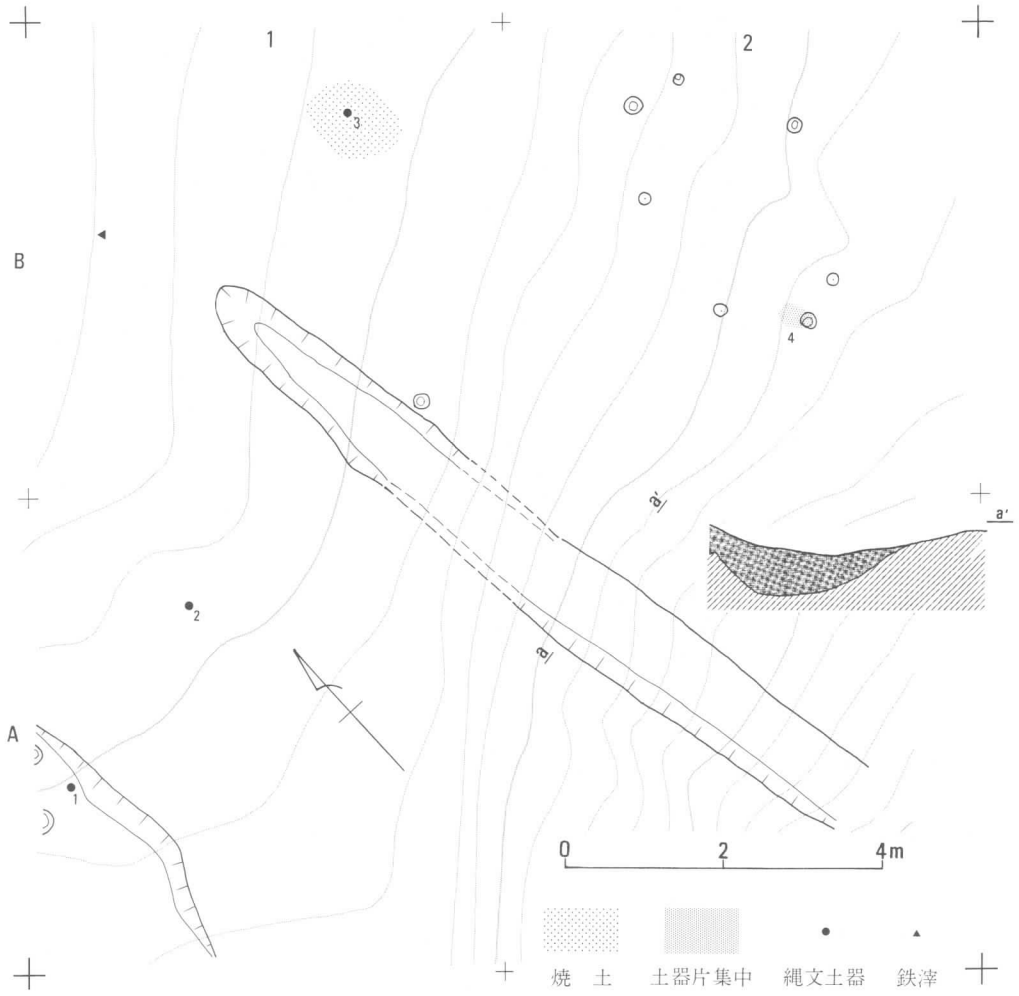
第２図　周辺の遺跡（■五分一城跡遺跡）

# Ⅲ 遺 構

## 1.城郭

五分一城は、標高95mの丘陵の尾根に構築されており、土塁・空堀の備えはない。新潟県中世城館跡等分布調査報告書によれば、東西約25m・南北約95mの長方形の郭を構え、その周囲を平地で

第3図　地形測量図




第４図　遺構分布図（等高線間隔は10cm）

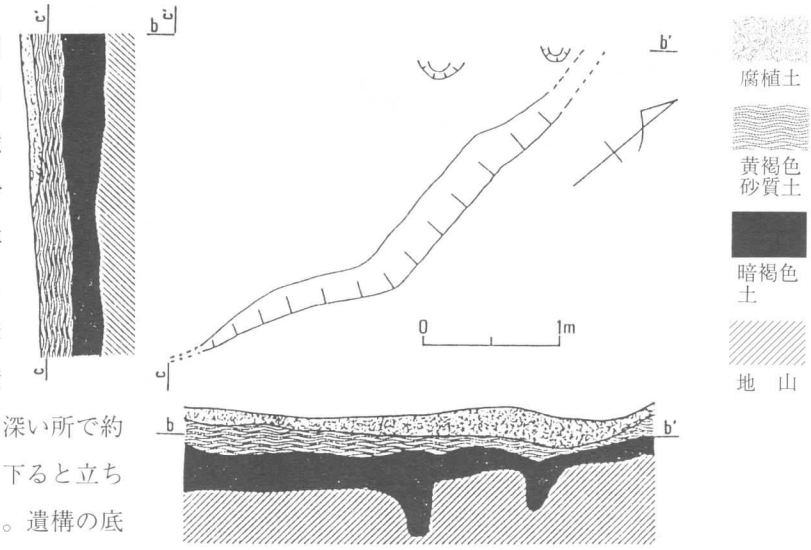
囲み、全体規模でも150m×100mにおさまるとされている。また、郭南方には20m×15mほどの窪地が存在し、涌き水を蓄えており、馬の足洗場といわれている。今回発掘した地域は、尾根の南側に位置する一段低い平担面の一部である。調査区域の南側は、比較的急斜面で馬の足洗場へと続くが、北側の尾根上の郭との段切は不明瞭である。発掘の結果、中世城館に伴うと考えられる遺構、および同時代の遺物はまったく検出されなかった。

## 2.溝

発掘区域の中央に存在し、斜面に直交してほぼ南北方向に延びている。斜面上位のＢ１グリドでスプーン状に緩く立ち上がって終わるが、下方は堀り込みが不明瞭ではあるが、おそらく調査区域外の急斜面上部にまで延びているものと考えられる。調査区域内の延長は10m、幅が約１mで、深さは35cmないし40cmである。溝を埋める覆土は、締まりの悪い淡褐色ないし褐色の砂質土からなり、地山を構成する土層に類似している。

### 3.竪穴状遺構

Ａ１グリッドの西側隅に存在する。遺構の円周から直径約４ｍ強の竪穴と考えられ、今回の調査では遺構全体の約４分の１を発掘したものと思われる。床面から地山面までの壁の高さは、斜面上位の深い所で約20cmを測るが、斜面を下ると立ち上がりは不明瞭になる。遺構の底面は、特に堅く締まっているということはなく、周辺の地山面とほぼ同様な堅さである。遺構内北側に壁に直交して２基のピットの存在することが確認されたが、内側のピットは直径30cm・深さ27cm、外側のピットは直径20cm・深さ19cmである。遺構を埋める土層は、褐色ないし暗褐色のやや粘性を帯びた砂質シルトで、炭化物がわずかに混入している。また、遺構内の北側で、ピットに近い立ち上がりの部分から、縄文土器片１点（図８－１・図16）が出土した。

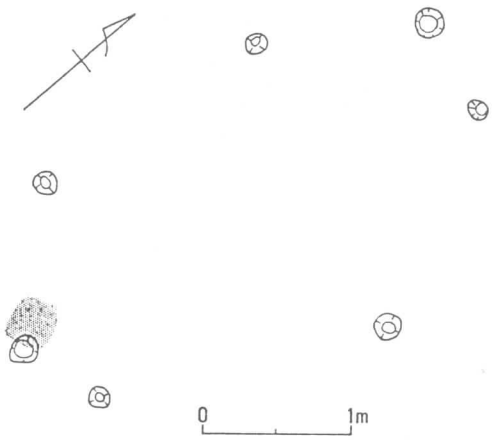


第５図　竪穴状遺構

遺構付近の層序は、上位から腐植土・黄褐色砂質シルト層・暗褐色砂質シルト層（覆土）・地山の小国層の４層に区分できるが、第２層の黄褐色シルト層はＡ１グリッド周辺にのみ分布し、斜面下方で薄くなり消滅する。

### 4.小ピット群

全部で７基の小ピットが、ほぼ楕円形状に分布しているものを一括して小ピット群とした。ピット群全体は、Ｂ２グリッドの東よりに位置し、竪穴状遺構とは溝を狭んで東西に相対する形で分布する。ピット群の構成する楕円形は、長軸が３ｍ60cm・短軸が２ｍ20cmで、内側部分には、細かい炭化物やブロック状の土塊が散在して全体に堅く締まっており、住居跡の床面状を呈している。各ピットは、直径が約20cmないし25cmで、深さは15cmから25cmほどである。このうち最も南側に位置するピットの脇から、同一固体の縄文土器片（図８－４～11・図16）が　一括して出土した。土器片は、地山を浅く堀りくぼめて埋めた壮態で発見されたが、能常に脆いため周辺の土とともに一括して取り上げざるをえなかった。



第６図　小ピット群

### 5.焼土

Ｂ１グリッドの東側で確認された。焼土や木炭の分布する範囲は、直径約１m30cm×90cmの楕円形である。地山面への掘り込みはほとんどなく、また、周辺や下部の焼けかたも少ない。おそらく１回の小規模な利用で終わったものであろう。焼土中央部から縄文土器片１点（図８－３・図16）が出土している。

第７図　焼　　土

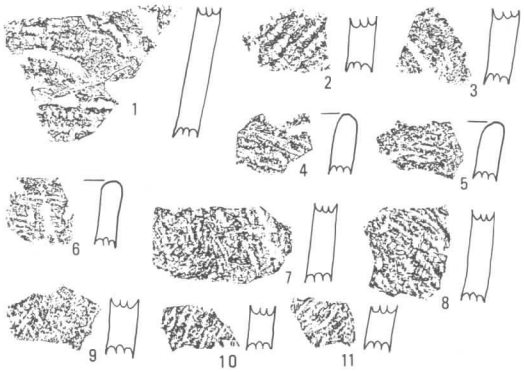
## Ⅵ 遺 物

### 1.縄文土器

全部で４ケ所から出土している。出土量は少なく、№４地点の一括土器も含め20点ほどである。図８・16の１～３は出土地点の番号と同じく、同４～11(10)は出土地点４の土器で同一固体である。

１は厚さは６mmの淡褐色を呈する土器片で、胎土は精製されており、焼成は良好である。器面にはＬＲの縄文が施されており、一部に沈線と縄文原体を押し付けた綾操文状の部分が認められる。２は厚さ 6.5mmで淡褐色を呈しており、胎土・焼成ともに良好である。ＬＲの縄文が施されており、１と同一固体の可能性がある。

３は焼土から出土した土器片で摩耗が著しい。表面は淡褐色を呈するが、内面は赤褐色で火にかかっているものと思われる。胎土は砂質で中に有色鉱物を多く含んでいる。４～11は同一固体で小ピット群中の南側のピット脇から出土した。厚さ７mmで黒灰色を呈し、胎土に軽石または凝灰岩と思われる灰白色の小礫を多く含む。また、非常に軽く繊維土器の可能性が強い。口縁は波状で（４・５）、 器面全体に細かい撚糸文が施文されている。




第８図　縄文土器拓本（約1/2）

### 2.土師器

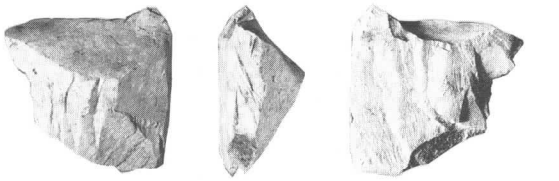
埋め戻し作業に伴って発見されたもので、出土地点は不明である。遺物は坏の底部で、かすかに糸切りの痕跡が認められる。推定される底径は約 6.4cmを測る。器壁外面は荒れているが、坏内面はロクロナデにより滑らかで、内外ともに一部煤が付着している。胎土はやや砂質ではあるが精選されている。

第９図　土師器実測図（約1/3）

### 3.石器

石器と認められるものが2点出土した。ひとつは石核で、他のひとつは台石である。石核はＢ２グリッドにおいて地山面直上から出土した。剝離方向は一定せず、意図的に整形されたものではなく、剝片を取りさった残核である。材質は流紋岩で風化が著しい。

台石はＢ２グリッドにおいて小ピット群付近から出土した。長軸が19.7cm・短軸が16.4cmの楕円形をした輝石安山岩で、厚さは 7.5cmである。面の一方は緩い曲面を呈し、ほぼ中央部に敲打痕と思われる浅い窪みが存在するが（図左）、 他の面は偏平である。おそらく偏平な方を下面にして使用したものであろう。また、火にかかった痕跡があり、図上部の剝離はそのために生じたものと考えられる。



第10図　石　　核（約1/3）

第11図　台　石（約1/4）

第12図　鉄　滓（約1/3）

### 4.鉄滓

Ｂ１グリッドの西よりから出土した。黄褐色ないしは黒褐色を呈しており、重さ28.3ｇ・縦2.6cm・最大幅1.7cm・厚さ1.1cmで、 直方体状を呈している。比重は約 1.4である。 表面には細かい気泡が多いものの比較的緻密である。

## まとめ

五分一城は天正６(1578)年の御館の乱の際、上杉景虎方の与板城攻撃に対する救援と景虎方の東山丘陵方面の城砦群監視のため、上杉景勝方の刈羽村赤田城主の斎藤氏が急造したものといわれている。前述したとおり小規模な、土塁も空堀ない簡素なつくりで、おそらく御館の乱が終了するとともに、その役割を終え廃城になったものであろう。今回の調査では、城砦跡に存在すると考えられる柵列や掘立柱建物などの遺構をはじめとして、中世末から近世初頭の遺物は一切出土せず、五分一城に関する資料を得ることはできなかった。Ａ１グリッドで確認された第２層が、城郭構築の際の盛土とも考えられるが、傾斜に沿って堆積し斜面下方で消滅することや、土層中に比較的新しい植物破片が存在することなどから、送電線鉄塔建設など最近の工事による廃土と考えたほうが妥当であろう。また、Ａ１グリッドから出土した小礫は、この第２層中に包含されており、地山を構成する小国層の堆積物と考えられる。

一方、出土した縄文土器・土師器・鉄滓などの遺物、および竪穴状遺構や小ピット群の存在から、

この丘陵尾根が縄文時代と古代の生活の場であった可能性が高い。

縄文土器は、出土数が少ないことと縄文部分のみの破片のため断定はできないが、文様や胎土の状態から１～３は後期後半に、４～11は前期初頭に比定することができよう。土師器は詳細は不明だが、平安時代の一般的な坏であろう。

竪穴状遺構は、ピットの存在や壁の立ち上がりの状態から、斜面に構築された竪穴住居跡と考えられる。この遺構の覆土からは縄文土器片が出土したが、覆土中であることや全面発掘でないこと、および今回の発掘において土師器が出土していることから、竪穴の構築時期は縄文時代とも古代とも考えられる。また、小ピット群は、その分布形態とピットに囲まれた内側の地山面の状態から、円錐に近い形の屋根を葺いた平地住居と考えられる。そして、南側に位置するピットの脇から出土した縄文土器は、この遺構に伴うものと思われ、この住居跡が縄文時代前期前半に属することを示唆している。なおこの遺構付近から出土した台石は、平地住居に伴うものかもしれない。発掘地域のほぼ中央部を南北に延びる溝は、溝を埋める覆土の締まりが悪く風化の度合いが少ないことや、覆土上部に竪穴状遺構に認められた第３層の暗褐色土層が存在しないことなどから、新しい時期に構築されたものと考えられる。五分一城に伴うものかどうかは不明であるが、遺構が浅いにもかかわらず埋没していなかったことを考えると、より新しい時期に設けられたものであろう。また、溝脇にピットが１基存在したが、締まりのない腐植土のみが内部を埋めておりごく最近掘られたもののようである。

今回の調査は五分一城の発掘ということであったが、城郭遺構よりむしろ縄文時代と縄文時代ないしは古代の遺構を確認する結果となった。この結果は、周辺の遺跡のありかたと併せ考えたとき、調査地域の特異性というより、むしろ島崎川流域一帯に分布する遺跡の普遍的形態を示したものと思われる。おそらく、今回の発掘区域周辺の緩斜面や平担面には、さらに遺構の存在することが推定される。また、島崎川流域の丘陵の尾根主陵部や沖積面に接する丘陵先端部、丘陵付近の沖積面下には、なお多くの遺跡の存在することが予想される。

**参考・引用文献**


上原甲子郎(1963)　幕島―新潟県分水町幕島遺跡調査報告―　分水町文化財調査報告第一集

岡本郁栄・金子拓男・家田順一郎・高橋陽子(1977)　西古志の考古学的調査　寺泊・出雲崎　pp. 181～199 新潟県文化財調査年報第16　新潟県教育委員会

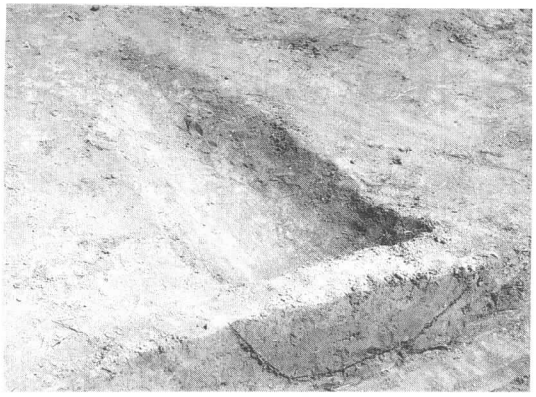
岡本郁栄・戸根与八郎・渡辺一三　(1988)　第一遍原始・古代　出雲崎町史資料編Ⅰ　pp. 3～46 出雲崎町史編纂委員会

新潟県(1980)　新潟県地質図・新潟県地質図説明書

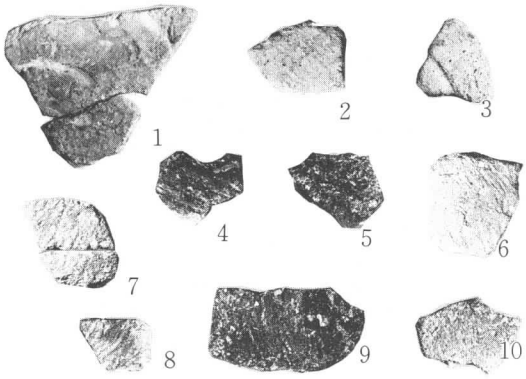
新潟県教育委員会(1979)　新潟県遺跡地図

新潟県教育委員会(1987)　新潟県中世城館跡等分布調査報告書

藤巻正信・伊與部倫夫(1991)　寺前遺跡　新潟県埋蔵文化財調査だよりNo.7　新潟県教育庁文化行政課



第13図　溝と断面




第16図　縄文土器（約 1/2）

第14図　竪穴状遺構

第17図　土師器坏

第15図　小ピット群

# 調査体制

調　査　主　体　寺泊町教育委員会（教育長　長谷川　達栄）
調査担当者　岡　本　郁　栄　（新潟県立新潟東高等学校教諭）
事　　務　　局　青木　昌栄、加藤　輝夫、星　博（寺泊町教育委員会）
整理・報告書作成　岡　本　郁　栄
調査作業員　長谷川　仙二、金子　十四太、長谷川　秀雄、池田　三芳、中島　政義
山崎　忠義、石川　シマ
お世話になった方々　稲田　欣一、永橋　勇司郎（東北電力㈱新潟支店）
難波　清美（東北電気工事㈱新潟支店）
㈲伊藤組、三松亭

新潟県寺泊町
五分一城跡発掘調査報告書

発行日　1991年3月25日
発　行　寺泊町教育委員会
新潟県三島郡寺泊町上田町7695－1
〒940-25　TEL(0258)75-2446
印　刷　有限会社　め　ぐ　み　工　房
新潟県長岡市千場1－2－17
〒940　TEL(0258)32-7427

1．赤坂山城跡
2．竹森城跡
3．年友城跡
4．伊那古城跡
5．田頭城跡
6．夏戸城跡
7．木島砦跡
8．五分一城跡
9．高内城跡
10．奈良崎砦跡
11．上桐城跡
12．金ケ崎城跡
13．小島谷城跡
14．当之浦城跡
15．本与板城跡
16．与板城跡
17．高畑城跡
●　八幡林遺跡

中世城館分布図　５万分の１地形図「三条」